

令和2年度山形県老人福祉施設協議会特養部会

ふっとふいかエル介護エピソード
受賞作品



審査結果

〈峯田会長賞〉「マスクスマイル」

〈森養護部会長賞〉「困難に立ち向かう強き心」

〈皆川特養部会長賞〉「諦めない心」

〈砂押デイ部会長賞〉「続けたその先」

〈橋本教授特別賞〉「祖父との思い出」



〈峯田会長賞〉「マスクスマイル」

山口知加

今般のコロナ禍の影響によって、私たち介護員も常時【マスク着用】が必須となっております。その環境下で、ふと、「いつもマスクをしているけど、利用者に私たちの笑顔は伝わっているのか？」と素朴な疑問が生まれました。

マスクをすることで、息苦しさから表情が険しくなったり、目元しか見えないことで怒っているように見えたり、大きな声を出そうとすることで口調が強くなる聞こえたり…。認知症の方のみならず、利用者は私たちの表情や口調、雰囲気をよく見えています。

最高の笑顔や声を届けようとしても目元が見えないことで伝わらないこともあり、利用者から「マスクを取って話してもらえませんか。」と言われたこともありまました。

そこで、「口元が見えれば…。」の思いを打破すべく、利用者に笑顔を届けたいという私たちの熱い思いが詰まった『笑顔が見えるマスク作り』のエピソードをご紹介します。

まずは、『フェースシールド（既製品）』を使用してみました。顔全体の表情が

見え、口元に空間があることで呼吸もしやすく、大きな声を出さなくてもスムーズに言葉を伝えることができましたが、弱点としては排泄ケアや移乗介助の際に顎の部分が利用者にあたらないように確認が必要でした。利用者からは、「笑顔が見えていい。」「何を話しているか良くわかる。」「優しい顔。若く見える。」などの声が聞かれました。

次に、透明フィルムで鼻から口を覆う『透明マスク』の手作りに挑戦。話をしているうちに、顎の位置がずれるので何度か付け直しが必要ではあるが、声が通りやすく口元も見える見えることから、利用者からはフェイスシールド同様に好評でした。

最後に、『口元だけが見えるマスク』です。

実際に聴覚障害者向けに手話をする方が使用し販売もされていますが、サージカルマスクの中心部を切り取りフィルムを張って手作りしてみました。口元は見えるものの、その部分しか見えないため、利用者からは、「何だか怖いな。そんな妖怪いそうだな。」と不評で、フィルムで息苦しくなり一時間で装着も断念。

現在も試行錯誤の途中ですが、大変だとか面倒くさいと言う職員は一人もおらず、「こうするともっといいよね。」「ここの角度はもっと上かな。」と、改善することが楽しくなっていて、利用者からも「あら、こっちもいいけどそっちはいい

いね。」と、一緒に改良を重ねています。

利用者の笑顔をみると、もっと頑張ろうとする私たち…。マスクによる肌荒れに悩む女性ならではの肌の話をしたり、慌ただしい業務の中にも楽しさやほつとする時間を見出しています。

先が見えないマスク着用生活。私たちが利用者に笑顔を伝えることばかり考えていましたが、逆に私たちが利用者から安らぎのある笑顔を受け取っていたことを今回の実践を通して感じました。

コロナウイルスに負けない私たち！様々な感染予防の対策を講じ、拡大を防ぐことはもちろん大切ですが、そのことに一生懸命になりすぎて「一番大切な何か」を決して忘れず、

今日も利用者と一緒に笑顔で元気に過ごしています。

※別紙に作成したマスクの画像を添付しましたのでご覧ください。



〈森養護部会長賞〉「困難に立ち向かう強き心」

愛と光と忍耐！

特養の看護師も悪くない

特別養護老人ホームで看護師として働き〇年が経過する。〇年前、福祉の看護の役割もわからないまま入職した。今は特養の看護は生活の場の看護で、私たちがいる医務室は学校の保健室のようなものである。十分な医療設備がない中で、生活の中での入居者様の健康を管理する。そして介護職員が入居者様をケアするうえで健康面からの不安が生じないようサポートすることが、看護師の大きな役割と感じている。介護職員が入居者を安全安心にケアしやすいような環境をつくる歌舞伎で言えば「黒子」のような存在であれば良いと思っている。特養で仕事してみると高齢者や認知症の方と関わることが想像以上にたのしく、最期まで一人ひとりとゆっくりかかわることができ、病院では味わえなかった人間味というか人の温かさを感じることがができる。入居者様が過ごされてきた長い人生のほんのちょっとしか関わっていない自分が最期の立ち合いに選んでいただいたこと嬉しく、その方の最期に立ち会わせていただいたことに感謝の気持ちでいっぱいになる。病院で看取りも経験してきたがチューブに繋がれ、病

気と闘い疲れた表情で無くなる方が多かった。しかし施設での看取りされるかは、ほぼ穏やかな表情で最期を迎える。人生を最期まで全うした安堵の表情がとても印象的である。最期にそのお顔を見ると、どんなに大変なことがあっても頑張ってきて良かったと思わせてくれる。

その反面、医師が常勤していないため、小さな傷の対応から命に関わることまでの判断力が問われ重圧に負けそうになることが多々あるのも事実である。また病院と違い裏付けする資料もないため、特養の看護師には経験と直感力が大切となってくる。自分の判断が正しいのか、大丈夫なのかと不安があるも、介護職員の観察力の高さから、入居者が「いつもと違う」という小さな変化に気付き報告してくれるので、重大になる前に早めの対応ができることはありがたい。

そして問題解決に向けて、介護職員・相談員・栄養士・理学療法士等多職種連携で一緒になって悩み・考え・頑張っていけるところが面白く働きがいにつながっている。

だからみんなに言いたい「特養の看護師も悪くない、面白い！楽しい！」
何事にも立ち向かう

強い心を持ち

今 このひとときを大切に生きていきます。

〈皆川特養部会長賞〉「諦めない心」

ホームなでしこチーム

インドネシアから初めて日本に来たのは二〇一五年の六月です。あれこれ五年ぐらい介護員として働きながら山形で過ごしています。

今考えれば全然知らない国の日本に来たことは勇気があったと思います。言葉や文化、食べ物など何も分からない場所で、自分の人生がどうなるのかも想像できませんでした。

でも、「地球は広いし同じ人間」と自分に言い聞かせ、この山形で色々なことを学ぶことができると信じて頑張る事にしました。

少しずつ日本語を勉強して自分の目標を目指しましたが、ながまち荘で初めて仕事をしたときに日本では地方により色々な言葉があることがわかりました、それはとても難しい「山形弁」です。あるご利用者様から「こわい」という言葉を言われました、私が知っている「こわい」は「怖い」でつらく耐えられない事と覚えてましたので「そんなに私の顔が怖いのか」と悲しみました。そんな時に「こわい」という言葉は「疲れる」という意味だと同僚が教えてくれました、安心したのとびっくりしたので今でも思い出になっています。それがきっかけで

日本という国、そして山形に深く興味を持ちました。そんな難しい山形弁にも少しずつ慣れて、ご利用者様と会話を楽しみながら、ふれあえばふれあうほど介護の仕事に感動する日々でした。

私は介護の技術を学んで、いつか「ながまち荘」のような施設を母国のインドネシアに建てたいと決めました！しかしその夢を叶えるのは簡単ではありませんせん。

第一ステップは介護福祉士の資格をとること。専門用語や日本の福祉制度など覚えなければいけないことがたくさんあり、それがなかなかうまくできなくて一回目の国家試験に合格することができず悔しい思いをしました。

ラスト一年のチャンスは無駄にしたくないので、一日一日の時間を大事にし、毎日仕事をしながら勉強を頑張りました。そして二回目の国家試験に合格することができました。山形で三人目の外国人介護福祉士だそうです。

ながまち荘の仲間にとくさんのサポートをして頂いたお陰で合格できたことを凄く感謝しています。

介護福祉士の資格を取る！との目標がクリアできたので、次の夢を叶えるためにこれからも色々な資格を取りたいと思っています。

とりあえず生活の質を上げるために運転免許も合格しました。色々トライ出来ることで介護の仕事も楽しくやる事ができています。



これからも、どんなに難しくても最後まで諦めずに頑張りたいと思います。

〈砂押デイ部会長賞〉「続けたその先」

居宅介護支援事業所

生まれた時から、四世代同居で大家族。高齢者の居る暮らしが当たり前で育ちました。だから介護の仕事は自分に合っていると、何か人の役に立ちたい、立てるのではないかと考え、この仕事に就きました。自分の中で三つの目標を立て、必ず叶えるんだという想いを抱き、働き始めたのでした。

十八年前、訪問介護の仕事を任せられました。その日は九十五才男性の自宅へ訪問し、入浴の支援でしたが、体調が悪く椅子に座っているだけでもやっとの状態。本人の強い拒否があり入浴を中止する事に。しかし、その事を同居の長男へ伝え、ものすごい剣幕で「風呂に入れるのが仕事だろ、入れろ！」等、怒鳴り散らされました。その時、その様子を見ていた本人が突然、「入る。」と言いました。浴槽は深さ一mもあり、またぐのもやっど。湯船に浸かり、「気持ちがいい」というのかと思ったら、「ごめんな、ごめんな。」と息を吐くように言いました。長男に対して、入浴ができない説明をしつかりできなかった悔しさ、専門職でありながらも、男性には無理をさせ逆に助けてもらってしまったという情けない思いがこみ上げ、また、その男性の優しさに申し訳なさとありがたさを感じ、涙を

こらえる事ができませんでした。

数日後、その方は亡くなりました。あの時、最後の力を振り絞ってくれたのだ
と思い、心に残る温かさを感じました。そして、はたしてこれで良かったのかと
考えさせられた出来事でした。

それから十数年が経過し異動となった居宅介護支援事業所。ケアマネジャー
として働いていたある時、一人暮らしの女性との出会いで私の考え方が変わ
りました。その女性は、心筋梗塞で四か月入院しており、「家に帰りたい。」と訴え
ましたが、医師からは、独居生活のため、退院許可は出せない、との見解でした。
遠方にいる娘からも、入院しているよう説得をして欲しいと頼まれていました。

私も内心は、医師が「ダメだ。」というのだから、『出来ないだろう。』と考
えていました。しかし、本人の意志は強く「死んでもいいから家で暮らしたい。」
…その言葉を聞いた瞬間、「あっ」と考えさせられました。

“家に帰ろう。私もその手伝いをしよう。”

退院にあたり、私は、訪問介護やデイサービス、ショートステイ等の在宅サ
ビスで生活のすべてを固めようと提案しましたが、本人は「窮屈だ。」と言っ
てすべて拒否。訪問看護と往診だけは、なんとか受け入れてもらい、本人の強い希
望で退院となりました。すると入院中では見られなかった生き生きとした表情
が伺えました。本人から「病院では、生きているが死んでいる。今は生きている

し何物にも代えられない。」と言葉が聞けたときは、退院して間違いはなかったと感じました。その出来事以来、改めて、生きることについて考えさせられました。実際には一人で生活できず沢山の人の支援があり、なんとか生活している。まずは、『やってみよう。』と考えるようになりました。

悩むこと、辛いこと、失敗することはたくさんあり、落ち込む事も多い仕事。しかし、上司と同僚達が忙しい中手を止め話を聞いてくれます。決して私を怒ったり、否定をせずに、全て受け止めてくれます。助けられてばかりです。わからないことも沢山あり、教えてもらいながら仕事をしています。人に聞けて、教えてもらえることのありがたさを実感しています。私もみんなのために出来ることを頑張りたいと思っておりますがまだ、役に立てていないと感じます。とてもとても感謝し日々暮らしています。

私には目標がありその目標に向け介護をしてきたつもりでしたが、みんなに面倒を見てもらい成長させてもらいここまで続けてこられました。目標もあつたからこそ、目先の辛いこと、困難なことも乗り越えてこられました。辛いことがあっても、辞めたいと思ったことは一度もありません。それ以上に楽しみをもつて生きていけば、楽しいことだけ残る……。時間はかかるかもしれないが、諦めないでいれば、いつかは必ず想いは叶うと信じ続けてきました。そして、時間ばかりでしたが、介護福祉士の資格取得、ケアマネジャーの資格取得、正職

員になる、という三つの目標を叶える事ができたのです。この経験は私の人生の宝物です。

振り返れば、人生のほとんどがなごまち荘中心だったと思います。人の役に立ちたいと思っていましたが、私の方が、人生の生き方、物の考え方を教えてもらい、心が救われたことが沢山あった十八年でした。この介護の世界は奥深く広がっており魅力を感じる世界だと思います。十八年前、この介護の世界に思い切って足を踏み入れてよかったと感じています。自分の自信がなく人前で話すことも苦手だった私…。今は、なごまち荘を辞めずに勤め続けてきた事が、私の自慢であり誇りであり、人生そのものと思っています。これから先も十七年、まだまだ働かせて頂きたいと思っています。

〈橋本教授特別賞〉「祖父との思い出」

《個人応募》

私は大学卒業し、平成二十年四月より社会人として介護の世界に飛び込みました。それから約十二年間の介護を振り返った時、祖父との思い出が蘇りました。私は小さい頃から、じいちゃん、ばあちゃん子で保育園年中から小学校六年生まで毎日、祖父母と一緒に寝ていました。その他にも、一緒に田んぼや畑へついで行ったり、スーパーで買い物をしたり、お風呂に入ったりと今思えば両親よりも一緒に過ごす時間が多かったように思えます（笑）

中学生、高校生になってからも祖父との接点はなくならず、冬季の間は部活終わりに毎日車で迎えに来てくれて、いつも外で待っていてくれました。大学時代は、仙台で一人暮らしをしていましたが、山形に帰省する際は乗り換えのないようにと山寺駅まで迎えに来てもらったり、感謝しきれない程可愛がってもらっていました。

そんなじいちゃん、ばあちゃん子の私は自然と高齢者関係の仕事に就きたいと考えるようになりました。そのため、大学も福祉系専門の大学に進学しました。今まで色んな事に飽きっぽかった私でしたが、ボランティアやサークルでの高

高齢者施設訪問には楽しみながら継続して参加することができ、それも今思えば祖父母の影響でお年寄りが好きだったことが大きかったのだと感じます。

就職後は結婚、子供の誕生が続き、再び実家で祖父母、両親と三世帯で生活するようになりました。六年ぶりに一緒に暮らすようになり感じた事は、祖父が弱々しくなっていた事でした。日記を書く事を日課にしていた祖父ですが、いつの頃からかペンを執った形跡がなくなり、起きていることが億劫になり徐々に食欲・水分も低下していきました。心配になった家族が病院に連れて行き受けた診断は『多臓器不全』。あらゆる臓器が不全となり、みるみるうちに衰弱していき祖父を現実として受け止めることができず、顔を合わせた後に涙が止まりませんでした。

限られた時間で大好きな祖父に何かしたいと思った私は、祖母も連れて祖父が大好きな河北の冷たい肉そばを食べに外出しました。時期は雪の降る2月で冷たい肉そばを食べるような時期ではありませんでしたが、祖父は歩くのも辛体で私に支えられながら一生懸命歩き、店内に入りました。もう来れないと悟ったのか昔から通っていた馴染みの店内を一通り眺め私に「ありがとう。」と言声をかけてくれました。お粥、ヨーグルトなどの固形物でない食事で摂取量も少なく、高カロリー飲料で栄養を補っていた祖父がその日は肉そばを1杯完食しました。「うまかった。」と笑顔で笑いかけてくれて私は嬉しくなり、「また、

来ようね」と約束しましたが、祖父はその一週間後に多臓器不全で他界しました。

もし、私が土木関係、IT関係、飲食店関係などの仕事に就いていたら、祖父を肉そば屋まで連れて行く事はなかったかもしれません。福祉関係の仕事に就き、知識や経験があったからこそ実現できた事なんだと、時が経ち改めて思います。福祉関係の仕事に興味を持ったきっかけが祖父であり、この仕事をして良かったと思えたのも祖父でした。